

白系ロシア人の残照

「深江文化村を巡る人々」

柚木原 博

昨今、日本ではロシアの文豪ドフトエフスキーが脚光を浴びているが、彼と双璧を成すロシア文学の巨人トルストイを忘れてはなるまい。

そのトルストイの末娘アレクサンドラが一年ばかり、今の神戸市東灘区深江南に住んでいた。

時は1920年後半、1917年のロシア革命後多くの白系ロシア人が迫害を逃れて札幌、東京、横浜と日本各地に流れ込む。そして1923年の関東大震災に遭遇



した東京、横浜に住む人達の内から安全な神戸に移り住む人が増えた。1930年には、一時約500人に達していた。彼等の大部分は北野の山本通りに居を構えたが、音楽を中心にした芸術家達が芦屋川河口西側に芸術村と言うべき深江文化村を築いた。

約2200坪の土地に、400坪の芝生の中庭を中心にして、周りに13軒の各々が個性ある、瀟洒な洋館を建てた。1923

（1925年に掛けてのことである。北は

緑色濃い六

甲



古澤邸、露人ラディスキー設計、1925年建

山の山並み、南は、ほんの目の前は白砂青松の砂浜を背景に、金髪碧眼の美女が芝生でのんびりと白い肌を曝して日光浴を楽しんで居る風景などは、当時の日本人にとっては、正に、忽然と現れた想像も出来ない別天地、別世界の話だった。

ロシア人達にとっても、山の緑、海の青、太陽が輝く風光明媚の土地は、本国では黒海沿岸のソチ以外には知らず、その上、西洋音楽を愛する民度の高い日本人達が回りに居るということに、亡命の悲哀をしばし忘れたに違いない。

大勢の音楽家の中でも、エマニュエル・メツテルはJOBK（現NHK）の大坂フィルハーモニック・オーケストラの指揮者であり、さらに、彼は、京都大学オーケストラの指揮者として朝比奈隆や服部良一らを育てた。また、彼の妻でバレエ教授のオソフスカヤは、芦屋と宝塚で、歌劇団の

授業や個人レッスンを行っていた。当時の宝塚歌劇の発展に多数の白系ロシア人音楽家達の貢献が大であったことは否定出来ないことである。否、彼等は関西ばかりでなく全国の音楽活動に大きな影響を与えた。

アレクサンドラは、世が世ならば伯爵家の娘であるが、1929年、苦勞の貧乏船旅で、ウラジオストクから敦賀經由日本にやって来た。日本の新聞社から講演依頼が有ったとの口実で、革命政府から許可を取り出国。経済的には苦しく、トルストイに関する講演料やロシア語講座の収入でかろうじて生活費を賄っていた。

既に神戸でチョコレートビジネスを始めていたフォードル・モロゾフが彼女のスポンサーとなり、何くれと世話をしたと言う。彼女が深江村から神戸の山本通のモロゾフ宅に通うとき、交通費節約のため、必ず、自転車を利用したとか。戦前のオンボロ自転車、しかも、距離にして約12キロはあるし、道路悪く、神戸は坂道多く、乗るには相当の体力が要る。彼女は逞しいロシア女性であったと言える。事実、彼女は第一次世界大戦時に従軍し、勲章を授与された英雄であったそうなの。

結局、彼女は1931年にモロゾフ氏の援助を受けてアメリカに亡命する。

さらに、芸術村を巡って、忘れてはならない人に、ロシア国籍のユダヤ人レオ・シロタ親娘が居る。彼はその時代の欧州では最高のピアニストとしての名声を勝ち得ていたが、第一時代戦後の欧州の政治不安、ユダヤ人迫害の高まりを憂慮して、山田耕筈の薦めもあり、一家で1929年来日

する。

その来日時、シベリア鉄道車中でベルリン音楽大学での留学を終えて帰国途上のバイオリン奏者の貴志康一と偶然に出会う。貴志は当時20歳。教養、才能に恵まれ、意欲満々の音楽家であった。

きわめて裕福な芦屋の家庭の出で、旧制甲南高出身。少年の頃から深江村の音楽家からバイオリン教育を受けた。貴志とシロタの友情は、貴志が1937年に28歳の短い生涯を終えるまで続いた。

シロタの愛娘、ベアテは来日時6歳。第



二次大戦後GHQの一員と成り、日本語を含め6ヶ国語に堪能な才女として、日本の戦後の生活に大きな影響を与えた日本国憲法第24条の男女平等の草案を起草するとは誰一人想像し得なかった。

シロタは来日後、東京音楽学校の教授に就き大勢の優秀な弟子を育てると共に、個人レッスンも熱心に行い、官立校出以外の才能あるピアニスト達を世に送り出した。とりわけ関西には毎月のように出かけ、その都度、必ず貴志と会い、深江村を訪れた

と言う。当然のことながら、彼は家族を伴いある夏休みを深江村で過ごし、ベアテは深江浜で海水浴を楽しんだに違いない。

彼が如何に当時有名であったかの例として、谷崎潤一郎の代表作『細雪』文中に彼の名前が出てくる。「生憎今日の会というのは、阪急御影の桑山邸にレオ・シロタ氏を聴く小さな集まりがあつて、それに三人が招待されていると言うわけで、雪子は他の会ならばよるこんで棄権するのだけど、ピアノと聴くと行かずにはおられないのであつた」主人公の雪子は正に純日本的な女性だが、関西のええしの育ちだけに、その頃はやっていた必須のピアノ教育は受けていた。

話は変わるが、谷崎はその頃深江村から山手に2キロ程上がった岡本に住んでいた。そこで彼の名作の一つである『痴人の愛』の執筆中であつた。トルストイ文学の影響を受けたと言われている谷崎であるから、きっと、知人を通して深江村を訪れ、アレクサンドラと会つたに相違ない。

その岡本の住まい、通称「ナオミの家」も保存運動も虚しく、2006年の夏に解体された。

シロタはその後東京音楽学校での熱心な指導、個人レッスン、全国演奏旅行と多忙な日々を過ごし、日本の音楽発展に多大の貢献をなす。しかしながら、世界政治の不協和音は日ごとに高まり、戦争の足音が聞こえだす。愛娘のベアテは10年間の日本での教育を終え、1939年に米国で大学教育を受けるため渡米する。一方、シロタは音楽教育遂行の責任を感じて日本に

妻と共に残る決意をする。しかし、直ぐに開戦。戦局が次第に悪化するにつれて、ユダヤ人排斥、あらぬスパイ容疑、食糧難、軽井沢強制疎開等辛苦を舐める。1945年の8月の終戦で開放されるが、心の傷は何時までも残った。ベアテは大学を最優秀で卒業し、Timesに勤めていたが、音信不通であつた両親が心配で、行方を捜すためGHQに職を求め、1945年に空軍機で第二の故郷である日本の厚木基地に降り立つ。やつと両親を探し出し、涙の再会を果たす。

1924年から1940年ごろまで、一時燦然と輝いた深江村も戦後の混乱、高度成長期、バブル期、さらに、阪神大震災を経た今、一帯は乱開発が進み、別世界だった洋館群は僅かに2軒を残すのみである。穏やかだった白砂青松の浜辺は護岸工事の無粋なコンクリートが覆っている。

かつての異国情緒たつぷりだった情景を描くのは心の中のみか。



富澤邸、現存する日本最古のツーバイフォー建築。

よく手入れされている。1925年竣工。

